

ン (125 pmol/ml) の上昇を認めた。INF- γ は血清、髄液とも上昇を認めなかった。

【結論】インフルエンザ関連性脳症の一部は、ウイルス感染に引き続く TNF- α を中心とした高サイトカイン血症による sepsis により生じる。

II. 特別講演

侵襲とサイトカイン

熊本大学医学部第二外科教授

小川道雄先生

サイトカインはある細胞から他の細胞に情報を伝え、「生体内部の恒常性を保ち、生き延びるための反応」を惹起するための情報伝達物質である。従って、この知識なくして、生体が異常事態に打ち勝って生存していく仕組みを理解することはできない。

サイトカインの作用は多種多様で、信号を受け取った細胞によって反応が全く異なるし、また同一の細胞でも条件やおかれた環境によって反応は全く異なってくる。

サイトカインはまず手術、あるいは外傷、熱傷、急性肺炎、敗血症など生体への侵襲に際して、その情報を全身に伝え、生体を守るための反応を惹起する役割を担っている。血中のサイトカインはいずれも侵襲の局所で産生され、それが血中に spill over したものであり、それによって種々の生体防御反応が惹起される。侵襲後の臓器不全の発生にも、このサイトカインによる生体防御反応が関与している。

癌細胞も種々のサイトカインを産出している。これによって、癌細胞は生体の情報伝達系を攪乱し、自己に有利な環境をつくって生存しつづける。更にサイトカインは非自己を攻撃する反応のためにも、重要な情報伝達を行なっている。従って、サイトカインは臓器移植における拒絶反応にも深く関与している。

このような悪性腫瘍や臓器移植におけるサイトカインの誘導も、サイトカインの本来の作用、すなわち「生体を護るための反応を惹起するための情報伝達」という目的を考えると理解しやすい。

今回は急速に発展しつつあるサイトカイン研究のうち、枝葉の部分は切り落として、サイトカインを「侵襲時に、生体の恒常性を保つために誘導される情報伝達物質である」としてとらえ、この立場から外科領域におけるサイ

トカイン研究の現況を紹介する。

第40回新潟救急医学会

日時 平成12年7月15日(土)

午後2:00~

会場 新潟大学医学部大講堂

I. 一般演題

1) カタボン・Low/Hi プラスチックバッグについて

前田 恵里 (日研化学株式会社 学術部)

カテコールアミンの1種である塩酸ドパミン(以下DA)は、生体内での代謝が速く¹⁾、持続的に投与しなければならない反面、アルカリ、光、酸素、熱等で酸化されて不活化する²⁾ため、用時調製する必要がある。カタボンは従来のアンプル製剤に比べ、緊急時に即時に使用できるように製剤の工夫により DA 200 mg または 600 mg を予め5%ブドウ糖溶液 200 mL に希釈調製した国内初のキット製品である。また DA は利尿、心収縮力増加、血管収縮作用を期待でき、投与速度によりその薬理作用が規定される。このため、DA 投与速度をカタボンの投与速度に換算できる投与量表が容器に貼付されている。以上のことから、カタボンは救急医療での迅速性、簡便性、省力化に寄与する製剤と考えられる³⁾。

昨年、容器がガラス瓶から、プラスチックバッグに変更になったため、外袋包装などの新たな製剤の工夫を含め、カタボン・Low/Hi について改めて紹介する。

- 1) Järnberg P-O, Bergtsson L, Ekstrand J, et al: Dopamine Infusion in man. Plasma catecholamine levels and pharmacokinetics, Acta anaeth. scand., 25, 328-331, 1981
- 2) Gardella, LA, Zaroslinski JF and Possley LH: Inotropin (dopamine hydrochloride) intravenous admixture, Am. J. Hosp. Pharm., 32, 575-578, 1975